



# また笑ったら

---

---

新保 章

---

# 白い街並みに

---

## 白い街並みに

手を引き引かれ  
初めて歩く  
異国の白い街並み

街の終わりは  
青い空の先にまで  
その坂道を伸ばし

白い時計台は僕らのために  
後どれだけの時を刻み  
僕らの歩みを  
祝福するのだろう  
あるいは呪わしい時の数々と

手にする土産は  
とぼけた顔の人形で  
その顔にいつまでも  
今日の日を思い出し笑う  
僕らであるようにと

白い街並みは  
街全体が  
大きな花活けのように  
鮮やかな色彩が良く似合う  
例えば太陽を写し取る赤い花

それは隣を歩く  
あなたの黒い髪にも  
飾りたい花飾りだとしたならば

木漏れ日のベンチ  
カフェテラスのコーヒーが  
少し苦く感じられる午後の舌

葉書を埋める言葉を人は探して  
口ごもる  
筆を折る  
そうして頭を抱えながら言葉を拾い集め

けれどつないだ手のひらから  
流れて来るもの以上に  
言葉はいらないとしたならば

言葉がこんなにも  
もどかしく感じられる  
風のようにただそこにあって  
心に流れて来るものを受け取るだけの幸いは

知らない風景に  
足進める力  
青空の先に消えて行く  
石の坂道の終わりまで  
ああ 十字架の先に陽射しが点っている

あなたの指先は  
いつからか僕の中に  
こんなにも深く  
根を生やしたのだろうか  
そこから吸い上げるものと  
そこに流れ込んで行くものと  
もう僕はその手を離せないでいる

# 笑顔を

---

## 笑顔を

見上げれば教会の鐘は

一つ一つの甘過ぎる音色の塊

目線を上げればいつでもそこで

途絶える道に誘われる眩暈に

よろめく腕を支えてくれるあなた

祝福は何処にあるのだろう

思えば他愛の無い話の中に

緑の多い坂道を上がる一步一步に

あなたの好きな物を一緒に数え

あなたの笑顔が暖かい雨のように

心に沁み込んで行くことに

あなたを傍らに感じると

陽だまりに触れているようだ

寒い日にもいつでも

温かな人の隣にある幸いは

僕の中に明るい場所を作る

時間を忘れたように

その瞳を眺めることが

楽しいことだと

人はいつから知るのだろう

その満ち足りた時間の静けさを

自然な微笑は不思議な造形の撓み

遠いところから

届けられるような柔らかな

何故に僕がかくも嬉しく感じられるのか

不意にその様子を覗きこんでいる

月の影を背中に感じながら

どれだけ見つめ合う

僕らの笑顔は守られるだろう

蝕もうとする者の多くから

僕らを守りたくて

けれど抗い続ける力の無さに

そのまなざしに魔法をかけられ

青い宝石となり

長い長い時間を眠りについてしまいたいと

出来ることならばあなたを

その懐に抱いて

僕に笑いかける

笑顔は嬉しくて

抱き寄せた肩の感触は

どこか夢のようで

凭れかかった僕はきっと重た過ぎて

## 砂浜で

---

### 砂浜で

波はお互いに手を引いて

波は戯れにその手を離す

いくつもの繋がれた手の隆起

離れて行く手の引きちぎられた窪み

その凹凸に流れ込む陽射しは

淡いおとぎ話の語り口の明るさで

砂浜を歩く足を

触りに来た手は暖かい

その手の力の思いがけぬ引きの強さに

よろめくあなたの手をとって

波打ち際の泡に足跡を

消されながら歩く

僕らの重み受け止めた砂は

深い海の底へと

連れ去られる戸惑いに揺れ

僕もそれを知っている

光届かない深淵に

知らぬ間に引き込まれて行く

息の出来ない心の怖さ

届かない声の苦しさを

波の音は静かに聴く物と

潮風は心地よく体に受ける物と

そのつないだ指の一つ一つが

頭擡げる迷妄に触れ鎮めてくれるから

海の向こうの半島の上には

頬杖を突くように

白い雲が休んでいる

その下の白い壁の家の暮らしを

あなたの面影に重ねて

穏やかな昼下がりを想像する

初めてのように見る海はエメラルド

波の音は祝福に歌うようにも聞こえ

どこかすすり泣くようにも聞こえ

あなたの髪が突然の潮風に  
投げあげられた時に  
青空は慌ててその色を濃くした  
一瞬の静止画に  
僕は呼吸が止まることを知り

あなたのことのすべてが  
大切に思えた  
その仕草も話し方も笑い方も  
あなたといることの楽しさ  
そうして悲しい心の軋みさえ

その時足元で砕けた  
波は胸の高鳴り  
かき消してくれる音をたて  
その水しぶきは  
僕の顔を濡らした

それは暖かな  
頬を伝わる涙の跡にも見えて  
振り向いたあなたを  
微笑ませるばかりだった

## また笑ったら

---

### また笑ったら

それは一時の通り雨

傘も無く無防備に濡れてしまったように

自然と一頻り

泣いてしまったらどうだろう

それから晴れ間をのぞかせるように

可愛い顔をしてまた笑ったら

あなたの心を重くする苦しみと

胸を刺す言葉の数々は

確かに僕の胸の実感でもあって

けれどその横顔を眺めているだけ

溜息よりも力の無い僕も

確かな実感であって

真っ直ぐ落ちる視線の先にある物に

僕も目を凝らすのだが

見えてこない寂しさにも

確かに感じている

それは高いところから来る

金色の声に見初められてのことと

我慢強いあなたを知っている

全てをだから自分で受け止めてしまう

とても柔らかな心で

どんな重いものにさえ

臆病にならずに

そうしていつでも笑って見せる

きっとけれど

受け止められない物が

あってもいいことを覚えて

誰かが一緒にあなたの横で

手を空に伸ばし支えてくれるから

一願わくばそれが僕であることを



人を責めないことは一つの美德で  
けれどその代わりに  
自分に振り向けられるその責め苦  
頬を一人で濡らす夜を

きつく抱きしめることで  
止められる涙であれば  
和らいで行く痛みであれば  
彫刻よりも動かずに  
僕はその肩をいつまでも  
抱き続けているだろうに

雨は大地を濡らす  
その恵みを受ける大地の芽吹き  
やがて陽ざしの匂いが地平に  
風に載り満ち渡る時に  
あなたはまたその可愛い顔で  
今度は心の底から笑えばいい

その時まで僕が  
側にいることも感じさせない位に  
透明な傘となって  
降る雨を受け止めて  
いられば良いのだが

# 止まり木に

---

## 止まり木に

心はいつも乱れて止まぬ

狂濤に投げ出されて

息つく暇を失くし

その煩いが終わらぬうちに

容赦なく押しつける時間の波頭は

あなたの顔に新たな煩いを押しつける

乾かぬ涙の上に

あなたが重ねる新たな涙の道筋は

やがてあなたの歩く轍と重なる

その遥かなる道が

初夏の朝の静かな陽ざしに明るむ

幸いの小道へと連なるように

白いカモミールの咲きほこる

甘い香と太陽とが渾然となった

その日のために

あなたを弄ぶ荒れた海の

僕は止まり木になろうと思う

あなたがどこで迷っても

その疲れた心を休ませる

僕はただ波に揺られ海原を漂い

あなたの行く先に寄りそっていく

あなたの重みを受け止めて

折れないしなやかさを持って

沈まない浮力を持って

止まる足傷つけぬ

滑らかな手触りをして

あなたがいつしか

荒れた海の表情さえも

穏やかに感じる

心の強さを持った時には

必要の無い海のガラクタとして

その時に僕は  
消えて行く雲で  
あなたの輪郭をなぞり

暖かな太陽に頼もう  
あなたの頬に陽ざしの唇を  
そっと押しあてて止まぬことを

あなたの嬉しさに寄り添い  
心一緒に震わせることに  
身を委ねる幸いの時間は  
静かに重なり  
広がって行く幸福の波紋

# 暴れる心に

---

## 暴れる心に

時々の思いは

僕の心を溢れて

流れ出してしまう

こうしてあなたに向かっていると

その時の思いは

まるで一つの生き物のように

荒々しい勢いを持って

時として暴力的で

そんな思いが僕から生み出されるなんて

僕は止める術を失くし

ただ呆然と見送る者として

僕ではない誰かが

あなたに向かい苛む

あなたの顔が苦しんだように見える

物言いたげな唇が撓み

悲しい色の瞳が

僕の上から離れて行く

それを見てまた軋み暴れ出す

僕の心はあまりにも貪欲だ

言葉はあまりに拙い鈍器だ

あなたの白い肌を赤く打ち

僕は何故

傷つけることをするのだろう

大切なはずのあなたを

心の悲鳴の耳鳴りに

眩暈を感じ

苦しみに溺れる者として

藁をも掴もうとする心持で

あなたはあなたの

苦しさを堪え微笑を湛えた

何も言わずに頷いた

僕の目を真っ直ぐに見つめ

脆弱な僕の心が恥ずかしかった

この暴れる心持を

一身に受け持つことが

僕の成すべきことと

唇を真一文字に思い

願わくは

心弱くなる時には

僕の横に

何も言わずにあなたが

肩を寄せてくれることを祈った

# 傍らに

---

## 傍らに

僕がいることできっと  
あなたを苦しめることがある  
ただ近づいていたいだけの  
距離の遠いもどかしさ

何をしているのかが分からなくなる  
僕の混乱を  
静かに埋めてみるあなたの胸に  
動き続ける鼓動を聞いて

その指先が  
僕の髪に触れて  
許される幸いは  
どこにあるのだろうか

離れた手でもまた  
しっかりと繋ぎ合わせ  
笑い合える温もりに

いつでもあなたの中で  
許される僕を知って  
それを真似てみたんだ  
見様見真似で

そうして僕も人を許す  
ことを覚えた  
少しずつだが  
それが僕には  
とても不思議なことでもあって

あなたと向かい合うことで  
生の色彩が生まれる  
聞きかじりのままだった言葉が  
僕の中でしっかりと分かり始める

あなたと一緒にあることで  
僕はまた学び直している  
赤子のように何も知らない者から  
生きることの意味を改めて

そうして願わくは  
僕もあなたに何かを  
与えられる者であるのなら

人の豊かさは  
人といふことで分け与えられる  
空っぽの容器の僕を  
こんなにも豊かに満たしてくれる  
あなたの傍らに  
僕はいつでも在りたいと思っている

# 名前を

---

## 名前を

金色の涙を流せと

秋が命じたから木々は

葉をそれぞれの色に染めて

一斉に風に散らすのだ

ハラハラと

時折は嵐のよう千々に乱れて

何故にそんなにも従順に

従う必要があるのだろう

秋の声にしかし僕らは

内なるものとしてその声を

宿している自分を知ることになる

怒りは何故にそれを

秘密に

今 耳打ちをする残酷

誰に向かって 憤る・・・・・・・・

それは寂しさ以外の

何物でもない

終わりを実感として

足音として確かに

耳にする自分は

掻き毟られる

音の出ない琴の音のものがき

僕は叫びたくなる

あなたの名前を殊更に

あなたの名前しか浮かばずに

あなたの名前だけを

それはけれど

溺れる者の足掻き

秋の金色の戸口に立って

金色の微笑を浮かべ

金色の羽根を生やし

金色の心をあなたに捧げる

捧げ尽くす

ただそれだけを喜びとして



その人の名前を呼ぶこと  
それだけでは褒められる事ではないのだ  
名前を呼ぶためにどれだけの  
長い時間を耐えて  
透き通った声で  
何も求めることも無く  
求めるとしたならばその最上の笑顔  
ただ嬉しく笑う  
白いカサブランカの香りと音色の

それは大きな静けさでしかない  
ただ大きく包み込むものでしかない  
騒ぎ立つ者  
嵐を内にしまった  
ただ抱きしめて  
泡になって消えてしまう  
その一瞬のために

秋  
人はそれぞれの戸口に立ち  
秋  
それは戸口を打ち鳴らす

僕はどれだけの準備をしてきたのだろう  
あなたの名前を呼ぶ  
あなたの笑顔に祈る  
その瞳に見入るだけの  
僕の声はしわがれている

その側に何も言わずに  
いてくれる人に  
ただ頭を垂れる  
おずおずと  
名前を呼ぶことが  
許されているのかと思う

まるで初めて  
呼びかけるように  
その名前を呼んだ  
嬉しい  
笑顔が  
愛しく  
眩しく と

## 湖水に

---

### 湖水に

暮れて行く湖には

柳の葉の影が魚となって

群れになって泳いでいく

赤い鱗をした物もいて

細波はその楽しさの笑い

ようやく自由になった影法師

その姿は心に現れては消える

あなたへの思いにも似て

とらえどころ無く

心地よく心くすぐり

時には

湖水深く潜り込んで

僕を物思いに沈め

ちゃぼんと

誰かが投げ込んだ石の音がする

深い湖水にその重さのままに沈んで行く

再び相見ることの無いその姿

どれだけの石がその光の届かない

蒼ざめた湖底には眠るの

きっと子供は

その手から離れた石を直ぐに忘れ

大人はいつまでも水面を見ている

石の沈み行く時間を聴いている

橋も橋の上を渡る人の姿も

夕陽の絵具で描かれた輪郭

自動車も赤い雲の乗り物になって

何処か知らない向こう岸へと渡って行く

もうこちらには戻っては来ない

後どれだけの言葉を紡げば

僕もその架け橋を渡れるのだろう

水の冷たい手に絡みとられて

沈んだ思いの骸

生み出されなかった言葉の塊を

悼みながら過ごす毎日の果てに

いつかあなたの胸に届く言葉を  
綴れる日があるのならば  
くすぐったい達成感と  
それしか出来なかった  
喪失感とを感じながら

僕はあなたの感触を  
手に誇らしく携えて行きたい  
別れることが習わしのこの世に  
別れがたく  
いつまでも離れがたきあなたの

## 離れ行く毎日に

---

### 離れ行く毎日に

掬った側から直ぐにこぼれて行く  
透明な水のように  
咲いた側から直ぐに花びらを散らす  
桜の花のように

離れて行く手を誰も  
引きとめることはできない  
その背後にある暗い流れ  
足を引きずる力には  
誰も抗うことができない

人は別れの予感に満ちている  
満ち足りた明るい朝にも  
悲しい音色が心に響く  
だからそれとは無しに涙が滲んで  
それを眠気と誤魔化して

だから離れて行く手は  
少しでも長く  
つないでいなければいけない  
少しでも多くの  
言葉をかわさなければいけない

冷めて行くばかりの  
体の芯を温める糧に  
夜になり寄り添い歩く時間は  
必然に足をゆっくりと

人の生は夢のごとくに頼りなく  
その夢の中で相見え  
月明かりの下で  
囁くように言葉交わす不思議さを

いつも感じている自分の限界の  
その先に行けない場所を  
あなたの面影と感触とで照らし

その場所に届けたなら僕は  
いつまでもあなたを見守り  
話しかける星屑として

夜風の切れる合間  
何かを感じあなたが  
黒い空を見上げる時に  
その奥に輝き続ける光として

数多の恩返し  
この場所でいつも  
温もりをくれるあなたのことを  
胸の中心で思っている

## 旅の終わりに

---

### 旅の終わりに

窓辺にはローズマリーの青い花飾り

その額縁に降りて来た三日月が

暗い部屋に一人いる僕の顔を仄かに照らす

こんな夜にはあなたのことを思っていると

寂しい唇が独りずに呟く

繰り返し寄せては帰る暖かな波に洗われて

いつしか涙に濡れていた

打ち捨てられた海の家のおもいでをしょっぱく感じながら

わからなかったことのお悔いを沈めこんだ海の色に

バックを抱えた僕は旅人のいざないに誘われて

波の音が繰り返し語るのは

僕がまだ夢を見ていた頃のお話

夏の夜白いシーツの縁をしっかりと掴んで

見ず知らずの世界に踏み込んで行くときめきと

空の遠い色合いは何が溶け込んでいるのだろう

懐かしく思えるその涙は

銀色の海に落ちて

僕を子守唄で眠らせようとする

白い貝殻の回廊を通り

窓辺に花咲くラベンダーを

枕元に一眠りするとき

深い夢の中で

あなたに会うことがあって

何故にいつでもあなたは

そんな微笑を絶やさずにいられるのか

旅する鞆にはいつでも

あなたの面影の葉をはさんで

そこに書き込まれた言葉は忘れたことは無い

旅に出たことの意味も失いかけて

茫々とした風に吹かれ

目を細めて苦しい顔をする僕は

あなたのロザリオを握りしめて

あなたの胸に再び眠ることを祈る

その時にはあなたの  
胸に届く旅の一言を携えて  
僕の長い旅の遍歴の後の  
陽に焼けた草の香りする笑顔と  
あなたに会うことを恥じない心持で

あなたはその時  
夢の中と寸分違わぬ笑顔で  
僕を迎え入れてくれますか

あなたに戻るために  
僕は旅に出ましたと  
あなたに跪いて  
僕は心から告げるから

## 彼の地で

---

### 彼の地で

揺られて運ばれて行くのは心も同じ  
乗り物酔いのように少し気分も悪く  
流れて行く風景は置いてきぼりで

こんなレールの上に乗っかっていると  
不安に思う  
見ず知らずのところへどんどんと  
運ばれて思い描いた自分では無い  
自分になっていることを

だから僕は時々あなたの横顔を覗き込み  
僕の位置を確認している  
誰かとの距離でしか測れない  
僕の居場所の不確かさ

閉じられた踏切の向こう側で  
小さな子供が手を振っている  
その純真な目は僕を見ていたのだろうか  
これからもご無事でと  
僕の長い旅路を気遣うように

もうきっと逢うこともない  
君こそ君の未来こそ  
明るい物であることを祈って

僕らが運ばれる先には  
在るのだろうか  
いつまでも君が悲しくなく  
いられる場所が

あなたの顔に憂いが浮かぶ度に  
それを取り繕うための術を探そうと  
慌てふためいている僕がいることを  
あなたはきっと知る由もないけれど



僕はあなたの寂しい顔を  
見て見ぬ振りをする程には強くなって  
おかしく取り乱してしまう  
あなたに捧げたくて  
僕のできることこの心を

それは彼の地での出来事  
そこでまたあなたに  
相見える時にはきっと  
たくさんの笑顔の様な  
向日葵が咲いている

その向日葵に負けること無く  
微笑むあなたからは  
陽ざしの匂いがして  
その側にたたずむ僕がいて

僕はそれできっと  
すっかりと満足して消える  
足跡もつけずに  
駆けあがる青空に

それで本当に  
満足なんだ